

# 令和元年度新宿区夏目漱石コンクール わたしの漱石、わたしの一行

## 中学生の部 最優秀賞

わたしの漱石、わたしの一行

大妻中学校 1年 加藤 璃子

作品名『坊っちゃん』  
選んだ一行 清はなんといってもほめてくれる

周囲の大人や両親に言わせると、私はただいま反抗期真最中らしいです。確かに中学生になり、新しい環境、初めての体験、たくさんの新しい友達との出会いから、自分が今までどんなに小さく狭く制限された生活を送っていたかがわかってきました。それに伴い、大人、特に一番近い存在の両親に対して理不尽に感じることが増えたので、態度に出ているのだと思います。そんな私にとって坊ちゃんは、気持ちが良い痛快で、自分の思った事をズバリと言える所が魅力的な人物です。現実には私の身近に坊ちゃんがいたら、少々厄介者の困った人で、積極的に友達にはなれそうもありませんが、クラスメイトとしてはいてほしい気がします。学校でもどこでも、周囲に合わせるか自分の意見を伝えるべきか、もし言ったら言ったで周りの反応がどうかなど、ベストは何なのか、注意を払う場面は多いですが、坊ちゃんだったらそんなことは思いつくこともなく堂々としているに違いありません。そんな坊ちゃんの自信がどう培われたのかが気になりました。そして読後に印象に残った一文が『清はなんといってもほめてくれる』です。

以前から母の本棚にある子育て本を何冊かこっそり読んでいるのですが、そこには表現は様々ですが共通して「自己肯定感」について書かれています。母親を早く亡くしている坊ちゃんですが、兄とは仲が悪く、父親は坊ちゃんにはひどく冷淡で無関心な態度に終始しています。そのような家庭環境でも坊ちゃんが、おどおど他人の顔を窺うような「うらなり」や、狡猾な「赤シャツ・野だいこ」のようにならず、変わりものではあっても正義感がありどこか憎めない人に成長したのには、清の存在が坊ちゃんの「自己肯定感」獲得にとっても大きくプラスに働いたからだと思います。清が坊ちゃんを『何といってもほめる』エピソードは日常の小さな出来事の描写で作中にいくつも出てきます。その中で私の好きな清の言葉は「あなたはまっすぐで、よいご気性だ。」です。ときには盲目的な清の言葉や態度に、坊ちゃんは素直に喜び照れますが、度が過ぎてはいまいかとあきれもします。が、そこには清への愛情や感謝、信頼が感じとれます。初めて坊ちゃんを読んだときは、赴任先の学校の生徒や癖のある同僚とのやり取りを面白く思っただけでしたが、今回は、清と坊ちゃんの関係がとても興味深く、坊ちゃんの言動の奥に清を感じました。そして、ただ肯定しほめてくれる坊ちゃんの清をとてもうらやましいと思いました。私にとっての清は祖父でしたが、もう亡くなってしまったので、いつか期限付きでも構わないので『なんといってもほめてくれる清』を少し真似てくれないかと、両親に頼んでみようかと機会をうかがっています。